

贊を得て出品點數も豫定をはるかに超過して三百四十點に達し、その大部分は昨年八月末府美術館に於て展觀せられ、次いで同十一月一日展覽會代表として荒木氏夫妻、西澤笛畝氏、湯原柳畝氏が渡邉されたのであつた。

開會中重ねて皇帝皇后兩陛下の御臨場を忝し、カンペンベツチ殿下、ダムロン殿下はじめ多數皇族の御來場あり、一般入場者の數は四萬を超え、又兩陛下御買上品十點をはじめ八十六點に及ぶ買約の申込あり、同國に於て曾て見ざる處と稱せられる程の成功を収めたのであつた。

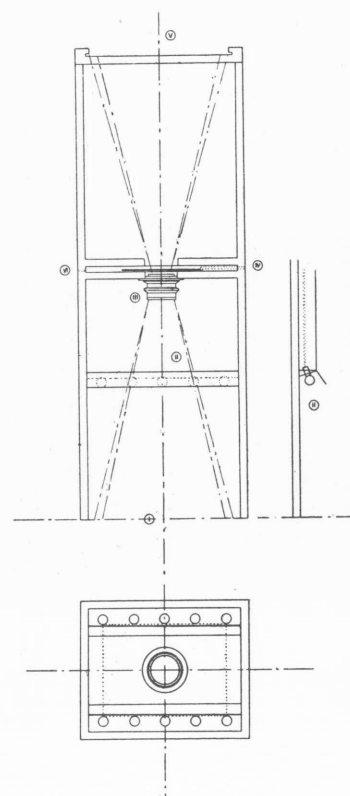
曩に吾人は伯林及びトレドオ市に開催された現代日本畫展覽會に關する報道を掲げ我美術の海外進出を慶賀したのであつたが、今またこゝに荒木氏の盡力によつて我美術をアジアの同胞に示し得たことを欣ぶものである。殊にこの展覽會が政府の主催によらず、全く荒木氏の盡力によるものであり、氏の努力によつて日暹國交上に多大の効果を収め得たことを想ふとき吾人は氏に對して大なる感謝の意を表するものである。

尙同展覽會代表の要務を帯びて渡邉された荒木十畝氏夫妻は去る三月十日に、西澤笛畝、湯原柳畝の兩氏は荒木氏に先立ち去る一月三十日歸京された。(杉田)

## 原寸大撮影用寫眞器に就て

繪畫や文書等の平面のものを原寸大に撮影する場合、普通の暗箱では操作が可なり煩雜で而も正確を期し難い憾みがある。美術研究所の如く、落款印記、繪畫の細部等の原寸大の寫眞撮影を頻繁に行ふ所では、何か特殊の裝置によつて手軽に敏活にそれを爲すことが是非必要とされる。この爲に研究所では簡單な器械を數年前より考案製作して使用してゐるが、是は學者の利便からず、研究所より學んで他にこれが類似の器械を作り使用されて居る向もある位であるから、茲に構造の大體を斯界に紹介しておき度いと思ふ。

この寫眞器の原理とする所は、犯罪捜査上に用ひられる指紋撮影器と同様で、「レンズの光心より其のレンズの焦點距離の二倍の距離に置かれた物體は、レンズを通して對稱の位置に等大の像を結ぶ。」と云ふにある。



- I 被寫體に接する面
- II 光源(電球)
- III レンズ
- IV レリーズの接續點
- V 焦點硝子面
- VI 光源用電氣コードの接續點

右の原理に基いて器械は圖に示す如く細長い箱形となし、一端は焦點硝子及び取枠を差込むこと普通の暗箱の如く、他の一端は開け放して被寫體に密接させるものとする。レンズは丁度兩端から等距離なる箱の中央に固定し、箱の全長を使用レンズの焦點距離の四倍の長さとしてゐるから、レンズより被寫體及び映像面への距離は夫々焦點距離の二倍の長さに一定され、常に原寸大の像が正確に焦點を結ぶこととなる。

携帯の便の爲にはなるべく全長を短くすることが望ましく、それには使用する乾板の大きさが許す範圍に於て焦點距離の短きもの、即ち廣角レンズを用ふるのが便利である。現在研究所の使用するのはホクトレンダー廣角コリニアレンズ F 12.5 f 15 cm のもので、カビネ形の寫眞が得られる。器械の寸法は全長六一糎、幅と厚さは夫々二三糎及び一八糎となるが、箱は木製革張である爲重量も軽く左程不便はない。

使用法は極めて簡單で被寫體の上に器械を俯けに載せ、蓄電池のコードを VI に差し込んで被寫體を照し焦點硝子によつて撮影すべき位置を決定する。この場合豫め薄紙に撮影面の大きさ(使用する乾板の大きさ)だけの穴を切り取つたものを用意して置き、之を被寫體の上に當てゝ位置を定め、その上に器械を

載せるならば焦點硝子を見る手数は省け硝子その物も不用となる。以下、取枠を嵌めて撮影する操作は通常の場合と變りはない。

以上に明らかなる如く、此の器械を用ふれば焦點を合せ映像の大きさを調節

## 新刊書評

### 歐米に於ける支那古鏡 梅原末治氏著

支那古鏡に關する我國に於ける研究は晩近考古學の發達につれて、その形狀紋樣などの美術的研究の外に、記銘の文獻的研究と古墳發掘其他に據る資料調査の業績とが逐次顯著になりて、本邦出土の支那古鏡や支那より舶載された遺品等に就いては、故富岡謙藏氏の「古鏡の研究」を始めとして、故高橋博士、濱田博士並に本書の著者梅原氏等の諸著及其他的諸家の之に關する研究論文や收輯圖錄等に依つて、略究明されてきてゐるが、歐米諸國に齎られた支那古鏡に關しては、縱へ歐米の學者の部分的研究が一二ならず發表されて居るにせよ、汎く歐米諸國に散在せる支那古鏡の調査研究の書は未だ曾て公刊されなかつた。

考古學と云はず、美術史と云はず、凡そ史實に交渉の深い學問の研究に於て、何よりも先に着手すべきことは資料の蒐集である。殊に支那古鏡の如く或種の形式のみに年號銘のあるものに於ては、樣式變遷を究明するにも、記銘そのものを點檢するにも、各種形式の鑑鏡と適確に年代の推定に資すべき遺品とを、可及的に多く蒐集若しくは蒐集されたものを汎く調査研究することが主要事なるは言ふを須ひないのである。

本書の著者は大正十五年初より三年四ヶ月に亙る歐米諸國の旅行に依つて、各地の著名な博物館、美術館のみならず個人の蒐集家を歴訪して、千數百面に上る多數の遺品に就いて調査研究の自由を與へられ、其の主要なるものゝ寫眞

する必要なく、又光源の明るさ一定なる爲に露出の時間も常に一定され、寫眞技術を有たぬ者にも正確な原寸大の寫眞を極めて容易に撮影することができるのである。(中根)

乃至拓影を恣に成し得たは、歐米の學界にまで廣く認められた著者の如き學者にして始めてゆるされる特權とも云ふべきであらう。而して本書は歐米諸國に於ける支那古鏡の收藏の狀況を、其寫眞及拓影寫眞を附して紹介すると共に、彼地に於ける東洋古美術の主なる收藏者を正確に知り得る至便を與へて居るのであれば、この種の資料蒐集と云ふ唯一事より觀ても、本書の價值は自ら定まると云ひ得べきである。

さて、本書は卷頭、亞米利加及歐洲各地に齎された支那古鏡の種類及その所在地並に收藏者を舉げて、その見聞調査せるところのものを列記し、次に——考古學上のフンドと仿製鏡の考察。所謂秦鏡の性質と支那鏡の起源。鐵鏡鍍金鏡及び方鏡の新資料。所謂隋鏡に就いて。複製古鏡の性質と其の起源。——の五項目に分けて各項に該當せる主要なる遺品の調査を基礎とし、或は記銘を録し或は本邦所在の同種類の遺品を比較して、其等が資料として如何に學術上の興味と價值とを有してゐるかを、主として考古學の觀點より審に檢討し、且また別に——歐米に於ける唐鏡に就いて。——の論文を併せ錄して、歐米諸國の博物館並に個人收藏にかゝる唐鏡の優秀品を舉げて、唐代の工藝美術が鏡背文に如何に適用されてあるかを詳細に觀察してゐるのである。尙、卷末に曾て佛教美術其他の雜誌に發表した著者の歐米諸國にて觀察した鑑鏡の特殊研究として取扱はれた論文——歐米で觀た佛像を表はした三面の古鏡。歐米で觀た狩獵文鏡。歐米に齎された日本出土の古鏡。——の三編が附録として加へられてある。吾等が本書を手にして、收載された多數の圖版を参照しつゝ通讀し直截に感じたことは、廣汎なる調査と精密なる推究とよりなる此の種の研究が、わが學